

高等学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

国 語

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿

学区	学 校 名	氏 名
1	都立羽田工業高等学校	鈴木 雅之
3	都立荻窪高等学校	辻 浦 信 人
3	都立石神井高等学校	田 中 均
4	都立小石川高等学校	大 田 雅 一
5	都立足立東高等学校	田 中 達 夫
6	都立深川高等学校	山 本 一 彦
6	都立向島工業高等学校	斎 藤 勉
7	都立片倉高等学校	山 口 慎 一
7	都立日野台高等学校	高 木 玲 子
9	都立東村山高等学校	宮 森 和 俊
10	都立狛江高等学校	宮 澤 水 子

担 当

教育庁 指導部高等学校教育指導課 指導主事 菅 沢 茂

研究主題

言語活動への関心・意欲を引き出して、実践的な国語の能力を養う指導の在り方

目 次

I	主題設定の理由	2
II	主題解明の方法	3
III	指導の実際	4
	1 言語活動への関心・意欲を引き出して、 実践的な国語の能力を養う現代文指導の工夫	4
	2 言語活動への関心・意欲を引き出して、 実践的な国語の能力を養う古文指導の工夫	12
	3 言語活動への関心・意欲を引き出して、 実践的な国語の能力を養う漢文指導の工夫	18
IV	まとめと今後の課題	24

〔言語活動への関心・意欲を引き出して、実践的な国語の能力を養う指導の在り方〕

I 主題設定の理由

情報化が高度に発達した社会の光と影の両面が指摘されるようになって久しい。ありとあらゆる情報がテレビ・雑誌・ビデオなどを通じて流され続けている。それはまさに氾濫という言葉がふさわしく思えるほどである。このような情報過多の社会にあって、情報を的確に処理し自分なりの判断を下していくことは、高校生にとり極めて困難であるが、重要な問題である。一方で、生徒の日常生活からは、このような今日の状況を、さほどの抵抗もなく受け入れている様子がうかがえる。体育祭や文化祭の活動を見ても、生徒はマスメディアのいろいろな情報をうまく取り入れ、自由奔放に活躍している。そこにはたくましさを感じるほどである。

しかし、一方では生徒の授業中の積極的な発言は年ごとに減ってきたように思われる。休み時間のおしゃべりでは饒舌に語り合うことがあっても、自己の問題や授業中のいわば公的な場面では急に黙り込んでしまう傾向が、近年強まっているという指摘もある。

文章に書かれていることを正確に理解してそれを客観的に批評したり、他人の意見を聞いてそれを正確に把握し自らの見解を述べたりという積極的な言語活動が、円滑に行われていないのである。言語による表現力の不足だけがその原因ではあるまい。根本的には、見たり聞いたりした情報を自己の問題としてとらえなおす能力の問題である。流行を追うような興味ではない、自分の周囲にある様々な情報や知識を、認識の段階にまで深めていこうとする関心や意欲が求められているのである。

さらに、他者の発した情報を自己の問題としてとらえなおすためには、同時代の他者と自己との関係に注目するだけでなく、文化や伝統についての考えを深めることも大切である。我が国の文化の特質として、例えば春に桜を賞美したり、秋にもののあわれを感じたりするような精神性が挙げられる。それは、個人的な感性というよりは国民一般の内面に根を下ろしており、一人一人の感受性までも規定していると言える。社会の中に、自分のものの見方や感じ方を規定するものがあることを自覚することもまた、生徒にとって主体的な生き方を目指すために必要なことであろう。

そのためには、自らの主体的な言語活動を高めていくことが重要な課題である。すなわち、言語を通して他者の存在を認識するとともに、他者との違いを考えながら自己を掘り下げて考えようとする姿勢が不可欠であり、また、そのような姿勢を育てる指導が、現在強く求められていると言えよう。

以上のことを考慮した上で、上記の研究主題を設定した。ここでの「関心・意欲を引き出して」とは、授業の初発にあたっての興味・関心を意味するのはもちろん、授業を通じて主体的に学んでいく姿勢を身に付けさせるため、内発的な動機付けを意図したものである。また、「実践的な国語の能力」とは、国語を的確に理解し、適切に表現する能力であり、現在自分の置かれている状況を切り開くための思考力、判断力、創造力等のことである。

具体的には、次の3項目を挙げ、研究の指針とした。

- ① 学習活動を通じて得た知識を自分自身の問題としてとらえなおせる能力。
- ② 自分の意見を相手に分かるように説明できる能力。
- ③ 理解し合えるまで質問し、納得できない点については反論することができる能力。

II 主題解明の方法

今年度の研究員は、標記の主題を設定し、現代文・古文・漢文の3班に分かれて、以下の3点を共通のねらいとして研究を進めた。すなわち、授業展開に際しては、言語活動に対する生徒の関心・意欲を引き出すために、

- ① 生徒の興味・関心を引き出せるような教材の選定、及びその取り扱いの工夫
- ② 事中評価に力点を置いた指導計画とその実践
- ③ 自己の問題としてとらえなおす契機としての作文の作成

という点に留意して研究を進め、表現・理解をあわせ、総合的かつ実践的な国語の能力の育成を目指した。

「現代文班」は、「読む」「話す」「聞く」「書く」の技術を系統的に指導していくことにより、実践的な国語の能力を養うことができると考えた。

具体的には、「やさしさ」という言葉をキーワードとして、生徒の生活実感に訴えながら学習意欲を引き出すように努めた。さらに、複数の教材を示し、グループで選択させ、「読む」「調べる」「話し合う」「発表する」「メモを取る」「書く」活動を試みた。グループ学習としたのは、生徒が互いに話し合うことを通して、「やさしさ」を自己の問題としてとらえ、関心を深め、思考を重ねていくことができると考えたからである。

最後に「やさしさ」をテーマとして、学習から得た知識を自己の問題としてとらえなおすよう作文を書かせてまとめとした。

「古文班」は、教材として『堤中納言物語』の中の、「虫めづる姫君」を選んだ。短編物語の軽妙な展開と印象的な人物描写に注目させることによって、古文に対する関心・意欲を引き出そうとしたのである。具体的には、各場面の中で表現に即して人物像を的確に読み取らせたり、他者の視点を通して登場人物の生き方について考えさせたりすることで、総合的に人物像を構築させることを試みた。評価においては事中評価を重視した。その際、また、重要語・文法事項の学習の精選化を図るとともに、課題プリントに工夫を加えた。

さらに、まとめの学習として、生徒に登場人物の中の一人を選ばせ、その人物になりきった視点から、成長後の姫君を考えるという作文を書かせた。自分の考えを論理的にまとめて述べることで、自分の生活や生き方を見つめ直す契機とさせるためである。

「漢文班」は、教材に、人間の具体的な行動を取り上げた作品を使うことにより、生徒の関心・意欲を引き出したと考えた。また、漢文の音読の内容理解に果たす役割と、暗唱の将来におけるより深い理解に繋がる可能性を重視しつつ、入門編・講読編に分けて研究を進めた。

入門編では中島敦の『弟子』を教材として、『論語』『史記』『孔子家語』『春秋左氏伝』『礼記』などの関連教材を取り上げ、孔子と弟子の人間像に迫ろうとした。講読編では、『史記』の刺客列伝「荊軻」を教材とした。作者司馬遷の生き方などから古代中国における「史官」の使命を理解させ、著者の登場人物に対する共感を通して、全編を貫くテーマ「士は己を知る者のために死す」を明らかにし、自己の生き方を見つめ直す契機とした。

全体のまとめとして、作者を含め、授業で取り上げた人物中から一人を選び感想文を書かせた。古人の生き方への共感を通して、現在の生徒自身の姿を浮き彫りにしたいと考えた。

Ⅲ 指導の実際

1 言語活動への関心・意欲を引き出して、実践的な国語の能力を養う現代文指導の工夫

1. 単元 「やさしさ」を考える

2. 教材 「川端康成『山の音』(評論・マーク・ピーターセン『続日本人の英語』より)『夕焼け』(詩・吉野弘)『小さいマリの歌』(詩・鮎川信夫)「パリのスイングドア」(旅行記・妹尾河童『河童が覗いたヨーロッパ』より)『天声人語』(コラム・朝日新聞)

3. 単元の目標 ① 言葉の多義性を理解し、自己の生活実感に基づいた問題を主体的に考えることにより、言葉や言語活動に対する関心・意欲を引き出す。

② 様々な言語活動に取り組むことにより、言語生活を豊かにする実践的な国語の能力を培う。

③ 他者の意見を要領よく聞き、自己と比較しながら考えをまとめ、表現することによって、自分の生活や生き方を見つめ直す契機とする。

4. 単元設定の理由

(研究主題の具体化にあたって)

研究主題は二つの事柄から構成されている。一つは「言語活動への関心・意欲を引き出す」ことであり、今一つは「実践的な国語の能力を養う」ことである。

言語活動への関心・意欲を引き出すということは、自ら進んで言語活動に参加する態度を育てることである。日常生活では様々な「新語」「造語」を生み出すなど、一見活発に話し表現しているように見える生徒も、授業となると受け身で指示待ちの姿勢である。一方的な講義や解説からは積極的な姿勢はつくりだせない。そこで現代文指導にあたっては、生徒の表現意欲を重視した。すなわち、提示する教材を精選し、多くの言語活動を指導計画に盛り込むことで関心・意欲を引き出そうとした。そして、よく吟味して言葉を用いる意識・態度を育て、適切な表現を見付けていく言語感覚を育てることを目指した。

「実践的な国語の能力」をあえて取り扱うのは、国語科の学習を通して得られた成果を現実生活を送る上で有効なものとし、言語生活を豊かにする一助としたいからである。言語生活を豊かにしていくためには、国語科にあっては様々な言語活動の技術を身に付けさせていくことが必要だが、それを現実の生活に見合う形で学習することを考えた。話しながらまとめる、聞きながら書くといった総合的な言語活動の技術を学ぶことを、実践的な国語の能力としてとらえたものである。

(指導計画作成の基本的な考え方)

指導計画作成にあたって、一つの言葉を取り上げ、それに教材や学習活動を関連させる指導を考えた。多くの言葉や情報が溢れる現在、一つの言葉のもつ意味について慎重に考える機会が少なくなっている。そして、言葉の内容が空疎になっている状況がある。改めて言葉の多義性や意味の深まりを考えてみる必要がある。そこで、私たちは「やさしさ」という言葉を取り上げた。多くの生徒が抵抗なく考えることのできるテーマ、しかも日常的に多く目に触れる機会の多い言葉、そして何よりも多義性の強い言葉として「やさしさ」を選んだ。

「やさしさ」をキーワードとして、生徒の生活実感に訴えながら学習意欲を引き出す。複数

の教材群を与え、グループ単位で選択し、調べ、考え、話し合う活動を通じて関心を深める。発表を聞き、メモを取り、構想メモを作り、作文を書くことで思考を積み重ねる。最後には、一人一人が自己の問題として、「やさしさ」をどのように受けとめ生活していくのか、これらを中心に学習計画を立てた。

(指導計画の概要)

導入段階：関心・意欲を引き出し高めていく指導過程である。このため学校の教材は教科書の中にあるものと考えている生徒たちに対して、自分たちの生活の中にこそ素材があることを示す指導過程とした。(1・2時)

展開段階：生徒の関心を発展させ、さらに思考を深めていく指導過程である。他者との意見の交換や、自ら積極的に調べる過程を通して、柔軟に考えさせていく過程と考えた。(3～6時)

結論段階：様々な材料を手元に置き、自己の思考を定着させる過程である。整理するための手立てを基に文章として表現する活動を通して、自分の考えを明らかにし、現実生活へと繋げていくものとする指導過程とした。(7・8時)

(指導案作成にあたって工夫したところ)

(1) 生徒の生活実感に働きかけることのできる教材・指導案とした。

導入教材は歌謡曲の歌詞を使用し、生徒に馴染みのあるものを選定した。その歌詞の中に「やさしさ」という言葉を含み、しかも様々な「やさしさ」が描かれているものを選んだ。また、適宜歌曲を聞かせるなどした。

展開段階に使用する教材は複数のものを用意した。親子の間、他人との間の「やさしさ」(人間関係の問題)、「やさしさ」という言葉(言語の問題)、日本と諸外国との「やさしさ」の違い(文化の問題)、社会的な問題としての「やさしさ」(政治の問題)と様々な分野にわたる教材を用意した。教材選定にあたっては授業のなかで討議しやすい問題や、示唆に富むものであることに留意した。指導にあたっては一つの教材に限定せず、生徒自身が最も関心のあるものを選び研究することとし、関心・意欲を自ら深めることのできる方法を考えた。

(2) 様々な言語活動を組織した。

一つの単元に様々な言語活動を配置した。指導者の側からの一方通行的な授業ではなくて、指導者と生徒の間にも複数の、生徒同士の間にも複数の言語活動を組織することによって学習への意欲を持続させ、言語技術も同時に身に付くことを企図したのである。

「読む」 主体的に読む学習を目指した。各教材群に対して表現を大切にしながら読みを深めるための指針を示し、それを中心にしながらグループの中で読み合う過程とした。

「調べる」 辞書や文献にあたり資料を発掘し討議することで、自らの問題意識を深めていくように指導した。

「話し合う」 グループ討論の経過を討議記録用紙に記入することで、自分たちの話し合いの経過を客観的に把握できるように指導した。

「発表する」 棒読みの発表になることを避けるために、発表事項を十分に内面化しておくことを指導し、プリントは最小限に押さえるよう指導した。

「メモを取る」 発表者の発表を聞き流すのではなく、自分にとって価値のある情報を素早くメモを取る訓練を組織した。

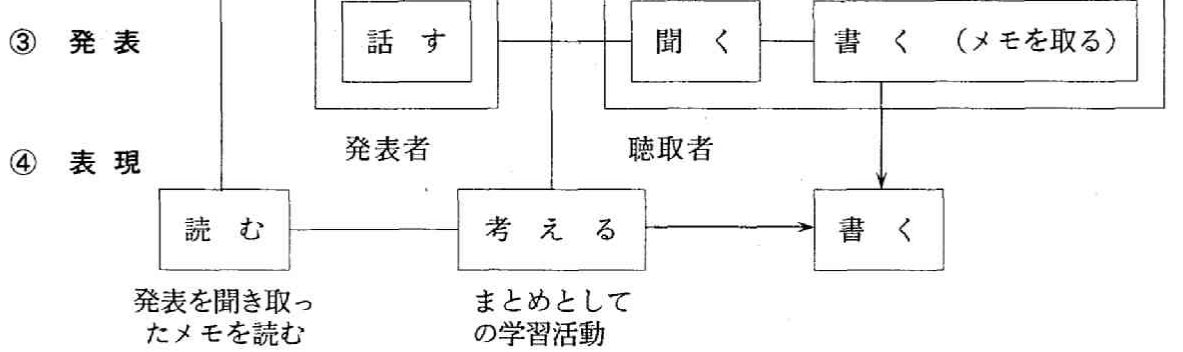
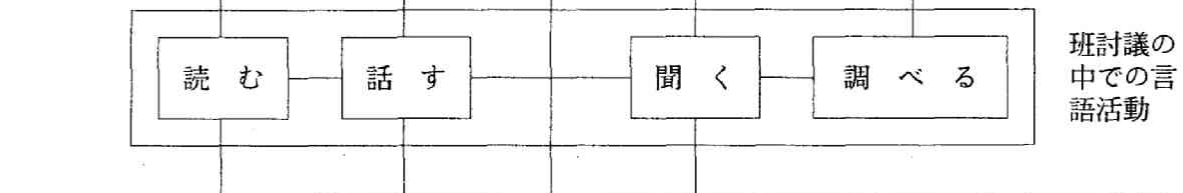
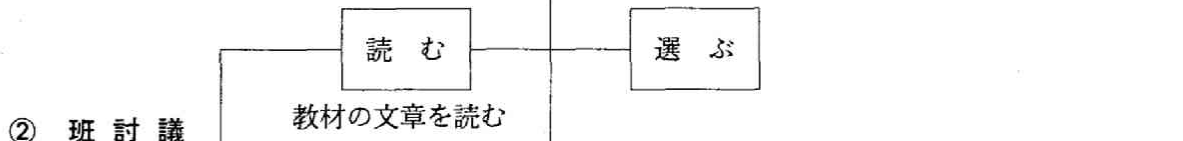
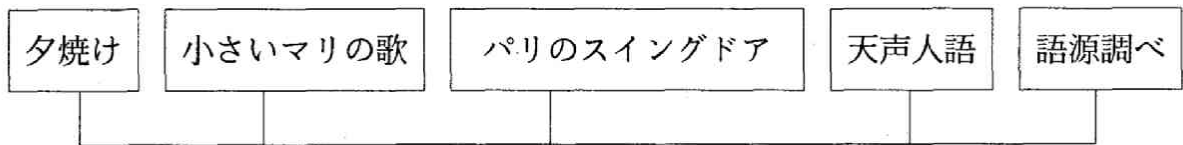
「書く」 数ある情報素材の中から、自己の思考回路を築き上げ、有効に相手に伝達する方法を示し、まとまった文章表現に挑ませた。

(3) 学習のまとめとしての表現に留意した。

様々な言語活動のまとめとして「表現」をおいた。展開部における音声中心の言語活動を客観的に振り返らせるとともに、生徒個々の活動として学習をしめくくらせる意味合いからである。また、文章表現を通して自己の思考を定着させ、さらに自分の力で発展させていくことができるように配慮した。このため、発表学習のメモの中にある、自分にとって有効な情報を整理する方法、それを自分の主張に合わせて適切に相手に伝達するための論理構成、そして原稿用紙にきちんと書いていくための技法などを提示し、表現させた。

●授業の流れ・概念図

① 教材選び



5. 指導計画（第3学年対象、配当時間8時間）

時	指導事項	学習活動	指導上の留意点
第1時	①「やさしさ」という言葉に対する興味・関心の喚起。	①身近な言語表現において、「やさしい」という言葉に着目し、その使用頻度の多さと意味の曖昧さに気付く。	・卑近な例を用いて教材への抵抗感をなくし、関心と取り組む意欲を引き出すような導入とする。
		<p>使用する教材と手順</p> <ul style="list-style-type: none"> * 作業プリント(1) 歌詞の穴埋め。 → 歌謡曲の歌詞に「やさしい」という語を補う。歌謡曲に限らず、自分たちの普段の生活を振り返る。 * 作業プリント(2) 「やさしい」に続く語の補充。 → 「やさしい()」の空欄に思い付く語句を各自記入し、発表する。多くの場面で用いる語であることを知る。 * 作業プリント(3) 「やさしさ」の意味付け。 → 普段使用する際の意味を各自記し、提出する。意味付けが容易でないことに気付く。 	
	《評価の観点》	ア 「やさしさ」という言葉のイメージを膨らませ関心をもつことができたか。	
第2時	②「やさしい」という言葉の多義性の確認。	②川端康成『山の音』原文と英訳文を比較することにより、「やさしく」という語の微妙な使い分けと、その英訳には複数の語が必要であることを知る。その活動を通して、「やさしい」の多義性を確かめる。	・『山の音』の作者、作品の説明を簡単にする。場面、登場人物の解説は丁寧に行い、「やさしく」の使い分けの理解に役立てさせる。
		<p>使用する教材と手順</p> <ul style="list-style-type: none"> * マーク・ピーターセン『続日本人の英語』・評論 （『山の音』原文とサイデンステッカーの英訳） (1) 原文中の「やさしく」を各自指摘する。 (2) それぞれの微妙なニュアンスの違いを理解する。 (3) さらに英訳を参照し、対応する英単語を指摘することで、英語では4つの単語を必要とすることに気付く。 * 参考資料 同書よりピーターセンの解説部分 	
	③「やさしさ」のとらえ方の個人差、多様性の確認。	③前時の作業プリント(3)を集計したものを、具体的かつ卑近な事例として読み、個々人の「やさしさ」のとらえ方の多様性に気付く。	・集計したまとめのプリントは指導者が作成し、配布する。
		使用する教材と手順	

第 2 時		<p>*参考プリント クラスごと「やさしさ」の意味 (前時提出した作業プリント3のまとめ)</p> <p>(1)配布されたプリントを読み、他者にとっての「やさしさ」の意味を知る。</p> <p>(2)自分の考える「やさしさ」の意味と比較する。</p> <p>(3)人により「やさしさ」のとらえ方に違いがあることに気付く。</p>
	《評価の観点》	イ 言葉の多義性に着目し関心を高めることができたか。
第 3 時	④文章や詩などに表現された「やさしさ」…班別研究討議。 〈読解, 考察, 討議(小集団での音声により自己表現)〉	<p>④班ごとに選択した教材を読み, 「やさしさ」について考え, 討議する。その結果を発表できるようにまとめる。</p> <p>班構成 4~5人 クラスに8~9班</p> <p>・班は討議しやすいものとなるよう配慮する。 ・討議記録用紙は班ごとに配布し, 発言の要旨を記録するように指示する。 ・机間巡視し, 適宜助言する。</p>
		<p>教材選択肢と考察の視点(概要)</p> <p>*「夕焼け」詩・吉野弘 →日常生活における「やさしさ」について考える。</p> <p>*「小さいマリの歌」詩・鮎川信夫 →親子関係における「やさしさ」について考える。</p> <p>*『パリのスイングドア』旅行記・妹尾河童 →異文化間の「やさしさ」の違いについて考える。</p> <p>*「天声人語」コラム・朝日新聞 →社会的な問題としての「やさしさ」について考える。</p> <p>*語源調べ(自由研究)・各種辞典 →言葉としての「やさしさ(い)」について調べる。</p> <p>手順</p> <p>(1)班を作り, 班長・司会・記録・発表係を決める。</p> <p>(2)教材選択肢から一つ選ぶ。</p> <p>(3)読解し, 考察の視点を手掛かりに話し合う。討議内容を記録する。(語源調べの班は, 辞典などを調べまとめる。)</p> <p>話し合う際の注意点</p> <p>・自分の意見を, 相手に分かるように表現する。</p> <p>・互いの発言を注意深く聞き, 主旨を正しく理解する。</p>
第 4 時	《評価の観点》	<p>ウ 班において積極的に発言できたか。</p> <p>エ 他の班員の意見を受け止めて理解することができたか。</p> <p>オ 班内の役割に従って討議を円滑に進めることができたか。</p>

第 5 時	⑤文章や詩などに表現された「やさしさ」…発表と聞き取り。 〈発表（音声による自己表現）聞き取り（理解と記録）〉	⑤「やさしさ」について班ごとに検討した内容を発表する。また他班の発表を聞き、視野を広げる。発表要旨のメモを取る。	<ul style="list-style-type: none"> 発表終了後、各自で「やさしさ」について考えたことを文章にまとめることを予告し、発表要旨のメモはその材料とするよう指示する。
		<p>発表する際の注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表の最初に教材本文の内容を説明する。 聞き取りやすいよう、姿勢、速度、声の大きさに配慮する。 内容が明確に伝わるよう、問題点、結論、理由を筋立てて話す。 <p>聞き取る際の注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> 発表をよく聞き、要旨を記録する。 分かりにくい場合は質問する。 	
	《評価の観点》	カ 発表内容は分かりやすくまとめられていたか。 キ 発表内容を理解し、メモを取ることができたか。 ク 発表内容に対して積極的に質問できたか。	
第 7 時	⑥「やさしさ」について、自分の意見の文章化 〈文字による自己表現、作文技術〉	⑥「やさしさ」についての自分の考えを論理的な文章にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 文章の字数は、400字から800字を目安にし、生徒の状態に合わせる。 机間巡視し、適宜助言する。
		<p>使用する教材</p> <ul style="list-style-type: none"> * 構成プリント * 作文用紙 <p>文章にまとめる際の注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> 今までの学習を通して得た自分の考えを、明快な主題文として表現する。 記録した発表のメモなどを参考にし、具体例を挙げる。 説得力のある文章となるよう、しっかりした論理を組み立てる。 制限時間内で書き上げるよう、時間配分を考えて書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 回収した作品は、添削評価し、次時以降に返却する。
	《評価の観点》	ケ 自分の意見に必要な素材を選択し論理的に構成することができたか。 コ 自分の意見を一定時間で分かりやすく文章に表現することができたか。	

6. 評価の観点（事後評価）

- ① 「聞く」「話す」という言語活動の領域を通じて、自己の考えを深め、積極的に発言することができたか。（討議記録の提出、指導者の観察による）
- ② 「聞く」「書く」「読む」という言語活動の系統的な流れの中で、自分にとって有益な情報を的確に収集できたか。（発表の聞き取りメモ、構成プリントの提出による）
- ③ 自分の結論に基づき、客観的かつ論理的に文章を構成することができたか。（構成プリント、作文の提出による）

総合：「聞く」「話す」「書く」「読む」という言語活動における各領域を有機的に結び付け、実践的な国語の能力を身に付けることができたか。また、この学習を契機として、自分の生活や生き方を見つめ直すことができたか。

7. 考察

（言語活動への関心・意欲を引き出す）

「言語活動への関心・意欲を引き出す」ために、まず、生徒の生活の実感に働きかける教材を選定し、指導案を作成することとした。それによって目標に近づくことを試みた。導入部における教材の提示、イメージの膨らませ方、生徒の意見の取り上げ方など、さらに改善・工夫の余地は残った。しかし、多様な生徒に対して積極的な働きかけを行い、ある程度の成果を引き出すことができたと考える。

「やさしさ」という言葉が、生徒の日常生活の中の潜在的な欲求と一致したため、抵抗なく学習に進めることができたこと。導入部の工夫によって言葉の多義性に思い至らせ関心を一層高めることができたこと。以上のような効果がもたらされた。

また、多様な学習形態により、生徒の関心・意欲が一層高まり、学習成果の発展が実践の中に見られた。展開部の発表学習において様々な工夫を生徒自ら行い発表し、活発に質疑応答が行われた。単に正答を求めるのではなく、自らの認識を深めるための学習であり、生活実感の中から考え、答え、発表する学習であった。このことがこうした積極性を生んだものと考えられる。

（実践的な国語の能力を養う）

「実践的な国語の能力を養う」ために、様々な言語活動を単元の中に組織し、目標に近づくことを試みた。特に、「聞く」「話す」の2領域に生徒の積極性を見い出すことができた。この活動には二つの場面（グループによる討議、クラス全体での発表と質疑）を用意したが、自分の意見も大切にしながら、他者の意見に耳を傾けつつ自問自答する学習活動を組織した。このことが積極性を生み出す背景となったものと考えられる。また、発表者の声量・速度・発表内容、聞く側のメモを取る要領など、言語技術の面でも大いに成果が見られた。

「読む」領域では、教材を投げかけ、考察の視点を提示し、生徒の力によってどこまで読み深められるかを試みた。文章の一つ一つの表現を掘下げて読むという点において、若干深まりに欠けたものの、書かれた内容について批判的に意見を出し合ったり、主題から話題を広げて考えたりするなどの点では、思考の広がりが見られた。

これまでの言語活動のまとめとして設定したのが「書く」領域である。様々な言語活動を通

して収集した「書く」材料を整理し、自分の思考の糧になる材料として選び出し、段落構成を意識する。そして、論理的な文章を作成する指導を行った。書く材料が豊富にあり、考えることへの積極的なかかわりを通じて、意欲的に作文に取り組む姿などが見られた。書き上がった作文も、他者の意見を自分の考えに取りこむなど、複眼的な広い視野で書かれた作品など、すぐれたものを見ることができた。論理的な思考、展開の点でも努力の跡が数多く感じられた。
(まとめと今後の課題)

第一に、導入部の指導上の工夫や、導入教材の選定に意を用いることによって、生徒の学習への動機付けを図ることが大切である。しかし、関心・意欲を引き出すために、学習計画そのものが改めて組織し直される必要があるだろう。導入に成功したとしても、その後の学習活動が平板なものであれば、生徒のやる気は育たない。実践的な言語活動の経験を通じて関心や意欲が高められ、そのことによって更に活動そのものも豊かに展開されていくものとする。そのため、今後とも生徒を励まし、支援していく視点から評価し直し、その工夫・改善をさらに検討していく必要がある。

第二には、こうした評価の在り方そのものを検討する必要がある。今年度、「評価の観点」としてとらえたことは、「正解に到達したか、しないか」ではなく、どれほど主体的に取り組む、自分なりの思考を深めたかに重点を置くことである。その際、第3・4時の班討議における積極性や第5・6時における発表者の工夫など、全体の中で単純に相対化しては評価できない点が問題となった。音声指導などの実技的な評価、生徒一人一人の個性を伸ばす評価などと併せて、学習過程を支援し意欲を喚起する評価の在り方を追求してきた。

第三に学習活動相互の密接な関連である。「実践的な国語の能力を養う」ために様々な言語活動を組織した。単に技術的な実践にとどまらず、生徒の言語生活を豊かにするための方法を工夫してみようという共通認識があった。生徒が日常生活を送る中で「読む」「聞く」「話す」「書く」という言語活動の各領域が単独で存在することは極めて少ない。つまり、聞いて書く、読んで書く、読んで話すといった複合的な言語活動になっており、その繰り返しの中から自己の認識を養い深めるものとする。このため、国語科の授業実践の中に、総合的な言語活動を積極的にとりこんでいくことが重要である。そして、それは系統的にしくまれたものでなければならない。生徒の発達段階に応じて、ある時期には個別の言語活動を時間をかけ指導していくとともに、ある時期には言語活動を組み合わせ、生徒の自主的な活動を誘発しながら実践を進めていくということの大切さを、改めて学ぶことができた。

《授業後の生徒の感想(例)》

- 普段全然授業に参加しない私が、詩を読んで理解しようとした事、自分の経験も含めて友人と話し合い考えたこと、高校に入って国語の勉強をした気がする。
- こんなふうに詩を読んで内容を考えることは楽しかった。話し合いが進み真剣になるにつれ意見の対立が出たのは自分でも驚いた。
- 同じ意見でも別の視点だったり足りない部分を補足されたり、他の人の意見を聞いたり話し合うことの大切さを知った。

2 言語活動への関心・意欲を引き出して、実践的な国語の能力を養う古文指導の工夫

1. 単元 物語を読む

2. 教材 「虫めづる姫君」(『堤中納言物語』)

3. 単元の目標

- ①短編物語のもつ軽妙な展開と印象的な人物描写に注目することによって、古文に対する関心・意欲を引き出す。
- ②時代背景や場面の中で、表現に即し、また他者の視点を通して人物像を的確にとらえる。
- ③自分の意見を論理的に述べるとともに、自分の生活、生き方を見つめる契機とする。
- ④古典の基本的な言語事項について理解する。

4. 単元設定の理由

古典文化の学習を通して現代の自分自身の生き方を見つめ直すということが、本単元を設定したねらいの一つである。古典学習は、いわば時・空間を超えた、日常生活に対置された世界に学ぶことである。このような新鮮とも思える体験を通して、生徒が日常なにげなく見過ごしている自分の生活を吟味していくのではないかと考えた。

このため本単元では、課題プリントを利用させることで、主人公の人物像を総合的に理解することを目標とした。そのため、言葉を文脈から独立したものではなく、ある場面の中である立場の人物が語った言葉として理解するとともに、他の登場人物を主人公にとっての他者としてとらえていくことに重点を置いて学習する。そして、この学習を通じて、生徒は、自分自身の問題としてこの自己と他者との関係をとらえなおし、自己の生き方を考える契機としていくのである。

このような目標から、「虫めづる姫君」を教材に選んだ。「虫めづる姫君」は、短編物語のもつ軽妙な展開と人物のおもしろさにおいて際立つ作品である。虫をかわいがる姫君は、当時の常識から見れば風変わりとも評されるものだが、同時に姫君の発言や態度からは、彼女が聡明で、理知的な人物であることも読み取ることができる。

未熟ながらも、真理を求め自分の生活を見直していこうとする姫君は、生徒にとっても身近で魅力的な存在として共感を呼ぶものであろう。他者からは理解され難く、非難や嘲笑の対象にすらなる姫君の言動の背後には姫君の生きる姿勢——未熟ではあるが、物事の実証的な洞察を通して、自ら生きる指針を学びとろうという堅固な姿勢——を見出すことができる。

授業に際しては、古文を現代語訳に置き換えて終わりとするのではなく、作品の枠組みとしての時代背景や場面の中で主人公の言動に着目し、人物像を多面的に浮かび上がらせることが大切である。重層的に配された他者の存在や会話、垣間見の表現を中心に、人物像を立体的、多面的にとらえさせるのである。

その過程の中で、生徒は、物語の登場人物や語り手、また、それらを取り囲む社会と自己とを相対化し、翻って、自己と他者、自己と社会、あるいは自己の存在について普段じっくり考えることのない課題に直面する。たとえば、社会や常識に対して曖昧な態度をとったり、自己の在り方を見直す契機となるはずの他者との摩擦から逃避したりする、現実の自分に気付くのである。

各時には課題プリントを用意し、表現への注意を喚起するとともに、自分なりの問題意識を

もたせていく。まとめの学習活動として、生徒に登場人物を一人選ばせ、その人物の視点から姫君について作文を記させる。「ある女房の手記」「二十年後の姫君」などの題で、他者の視点に立ったり、時間の経過を考えたりすることによって、自己を客観的に見つめるようにする。自分なりの問題意識を表現として定着させ、自己の問題としてとらえなおさせる契機とする。

5. 指導計画 (第2学年対象, 配当時間7時間)

時	指導事項	学 習 活 動	指導上の留意点
第 1 時	(導入) ①読解への 動機付け ②音読	①「蝶」「虫」「めづ」「姫君」, さらに「按察使の大納言」「かしづく」などの語に着目することにより, 次の3段階に分けて, 「姫君」像を具体的に想像する。 (i) 題名のみを読んだ段階 (ii) 本文2行目までを読んだ段階 (iii) 本文13行目までを読んだ段階 ②姫君の置かれている状況について発表する。 ③次の点に注意しながら, 斉読する。 ・姫君の年齢 ・登場人物 ・誰の言葉か	①段階をおって次の3点に整理する。 1) 当時の一般的な姫君像と「虫」のイメージの多様性 2) 「蝶」と「虫」の対比に見る美意識の差異と, 姫君の身分やその入内の可能性 3) 姫君の風変わりな言動 ②音読に際しては, 以後の読解の要点に注目させるため, あらかじめ質問をしておく。 ③課題(一)を配付し, 次時の読解の手掛かりとする。
時	<p style="text-align: center;">《 評 価 の 観 点 》</p> <p>ア 姫君が, 当時の一般的な姫君像から大きく外れている点を, 指摘できたか。 イ 入内の可能性を考慮した上で, 姫君の年齢や日常生活について, 自分なりの感想をもつことができたか。 ウ 正確な音読ができたか。</p>		<p style="text-align: center;">△生徒の反応▽</p> <p>第1段階: 姿や泣き声の美しい虫を物静かに鑑賞する上流階級の姫君「引き目, 鉤鼻, 下ぶくれ」像 第2段階: 蝶と対比されるような虫をかわいがる按察使の大納言の姫君大切に育てられ, 入内の可能性もある。 第3段階: 手に毛虫を乗せて, まじまじと観察する変わり者の姫君</p>
第 2 時	(展開1) ①姫君の人物像の読解 その1・日常の言動から ②音読	①表現に即して, 次の2点から, 姫君の人物像をまとめる。 (i) 姫君が, 自己の生き方の指針としているものの見方・考え方 (ii) それに基づく姫君の日常的な言動 ②姫君の日常的な言動が, 姫君の置かれている社会的な枠組みから外れている点を, 女房たちの反応や前時の①を踏まえて理解する。	①次の表現に注目させる。 考え方: 「人はまことあり, ~心ばへをかしけれ」 言動(虫に対して): 「これがならむさまを見む」「烏毛虫の, ~心にくけれ」 言動(自分に対して): 「人は~わろし」「眉」「齒黒め」 ②課題(二)を配付し, 次時の読解の手掛かりとする。

<p>第2時</p>	<p>〈評価の観点〉</p> <p>ア 虫を愛でることと身だしなみを調えないことが、同じ考え方に基づくことを理解できたか。</p> <p>イ 姫君の置かれている社会的な立場を理解できたか。</p> <p>ウ 女房たちの困惑の原因を具体的に指摘できたか。</p>		<p>〔板書例〕</p>
<p>第3時</p>	<p>(展開2)</p> <p>①姫君の人物像の読解 その2・社会的な側面から</p> <p>②音読</p>	<p>①次の2点に着目して、親たちの発言の真意を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・姫君の置かれている社会的な立場。 ・姫君に最も近い他者の立場からの発言である点。 <p>②姫君の行動原理が、親を含めた他者から受け入れられにくい理由を、次の2面からとらえ理解を深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・姫君の立場から。 ・親たちの立場から。 	<p>①親たちが危惧していることを次の点を手掛かりとして、具体的に挙げさせていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 「音聞き」の内容と、それが姫君に与える影響。 2) 身分や年齢に即した社会常識として姫君に求められているもの。 3) 後見のない姫君の一生。 <p>②課題(三)を配付し、次時の読解の手掛かりとする。</p>
<p>第4時</p>	<p>〈評価の観点〉</p> <p>ア 親たちの危惧が、娘の将来(結婚)に関するものであることを指摘できたか。</p> <p>イ 姫君と親との対話のすれ違いについて考えを深めることができたか。</p> <p>ウ 親たちの発言が、姫君に最も近い他者としての視点に立っていることを理解できたか。</p>	<p>△発問例▽</p>	<p>Q1 親たちは、姫君のことをどう思い何を心配しているのか。</p> <p>Q2 どのような噂が広まることを、どのような理由から心配しているのか。</p> <p>Q3 姫君がもし男の童だったら、親の反応はどうだろうか。親は姫君に対して、どのような立場から、その言動をたしなめているか。</p>
<p>第4時</p>	<p>(展開3)</p> <p>①姫君の人物像の読解 その3・蛇事件を通して</p> <p>②音読</p>	<p>①姫君の発言と行動を整理することによって、その不一致に注目し、姫君の考え方の、実践的な面における理想と現実について明らかにする。</p> <p>②蛇が作り物であると気付く前後の女房たちと大殿の反応の違いを、次の点に着目して理解する。</p> <p>大殿 (i) 娘の身を案じ、女房を叱る。 (ii) 蛇の作り主をほめる。 (iii) 娘の言動をたしなめ、返歌を勧める。</p> <p>女房 (i) 姫君の言行の不一致を笑い、大殿に言い付ける (ii) 蛇の作り主を非難する。 (iii) 返歌を勧める。</p> <p>③蛇の送り主の人物像も考える。</p>	<p>①次の表現に着目させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・姫君の理想：「君はいとのどかにて」「なまめかしきうちしも～」など。 ・姫君の現実：「うちわななかし」「立ち所居所蝶のごとく～」 ・送り主の人物像：「ある上達部の御子、うちはやりてものおぢせず」「いかで見ばや」「物よくしける人かな」 <p>②大殿が蛇ではなく作り主をほめている点などから、返歌を勧める意図についても示唆する。</p> <p>③課題(四)を配付し、次時の読解の手掛かりとする。</p>

第 4 時	<p>④②・③を通して、姫君を取り巻く他者存在を、次の3段階に分けてとらえ直す。</p> <p>(i) 親。 (ii) 女房たち。 (iii) 蛇の送り主。</p>		
第 5 時	<p>《 評価の観点 》</p> <p>ア 姫君の発言と行動の不一致を指摘できたか。</p> <p>イ 姫君が理想的な生き方を守ろうとしているものの、現実には未熟である点を理解できたか。</p> <p>ウ 登場人物の、姫君への接し方の違いを指摘することによって他者存在について考えを深められたか。</p>	<p>《 板書例 》</p>	<p>蛇事件を通して明らかになったこと</p> <p>その、姫君について</p> <p>蛇の文様は、生前の親から知られた。</p> <p>蛇の外見だけで怖がるなんてけしからん</p> <p>「うらわななかー顔はかやうに。」</p> <p>「立ちまじろ居まじろ蜘蛛のごとく。」</p> <p>「うらつぷやま。」</p>
第 5 時	<p>(展開4)</p> <p>①垣間見のしくみの理解</p> <p>②姫君の人物像の読解</p> <p>その4・右馬佐の視点から</p> <p>②音読</p>	<p>①垣間見の場面の描写を次のような二面性を指摘した上で、表現内容を的確にとらえる手だてとする。</p> <p>見る側(右馬佐):内面(心情・感想)が語られる。</p> <p>見られる側(姫君):外見(容姿・態度)が語られる。</p> <p>②視点人物の人物像を確認した上で、姫君の容姿の特徴を整理し、姫君が潜在的には卓越した美質を備えている点を読み取る。</p> <p>③姫君の美質が十分に発現されていない理由をまとめ、姫君の人物像について理解を深める。</p>	<p>①見られる側の内面は、その発言や態度から推察できることも確認する。</p> <p>②美質の基準については、当時の一般的な美意識からだけでなく、右馬佐という好き者の視点による描写であることを確認する。</p> <p>③「人はすべてつくろふところあるはわろし」という発言の根本にある考え方について確認する。</p> <p>④課題(五)を配付し、次時の読解の手掛かりとする</p>
第 5 時	<p>《 評価の観点 》</p> <p>ア 垣間見の場面の読み方に従って、読解を深めることができたか。</p> <p>イ 姫君の容姿の特徴として、次の2点を理解できたか。</p> <p>(i) 卓越した美質の潜在化。</p> <p>(ii) 美質の発現を妨げている姫君の生き方。</p> <p>ウ 当時の美意識に興味をもてたか。</p>	<p>《 板書例 》</p>	
第 5 時	<p>(展開5)</p>	<p>①姫君が大輔の注意をそのまま聞き入</p>	<p>①姫君は人目につく場所には身</p>

第 6 時	①姫君の人物像の読解 その5・まとめ ②音読	れず、童に事実を確かめさせようとした理由と、事実を確かめた後の姫君の行動について考える。 ②姫君の卓越した美質が、姫君自身の選んだ生き方によって十分発現されていないことを確認する。 ③姫君が自ら選んだ生き方であっても他者である右馬佐からは、姫君の欠点としてしかとらえられない点を読み取る。	を置かないという当時の常識を確認するとともに、次の表現にも注目する。 「さすがに、親たちにもさし向かひたまはず～」 ②右馬佐の視点による次の表現に注目させる。 「うとましかるべきさま」 「わずらはしきけ」 「むくつけき心」 「かばかりなるさま」 ③課題（六）を配付し、次時の読解の手掛かりとする。
時	《 評 価 の 観 点 》 ア 姫君の生活態度について、次の2面から理解を深めることができたか。 (i) 自ら選んだ生き方に基づく実証的な態度。 (ii) 「常識」的な態度。 イ 右馬佐がとらえた姫君の人物像をまとめることができたか。	発 問 例	Q 1 「それ、さばれ、もの恥づかしからず」と内容的に矛盾する姫君の言動を示せ。 Q 2 「それ、さばれ、～」と言っていた姫君が、結局「走り入」った理由は。 Q 3 「立ち走り」と「走り入り」の行動には、どのような違いがあるか。 Q 4 このような一連の言動から、姫君のどのような行動パターン、考え方が伺えるか。
第 7 時	(まとめ) ①通読 ②姫君の生き方に対する批評 自分自身の生き方について	①全文を読み通し、次の点について、姫君の成長に伴う質的变化の可能性の面から自分の考えを深める。 (i) 登場人物と姫君とのかかわり方。 (ii) 姫君の置かれている状況。 (iii) 姫君の言動とものの見方、考え方。 ②人物設定の多様性を念頭に入れた上で、登場人物を一人選び、その人物の視点から姫君についてまとめる。その際、何年かたった後というような時間の経過を前提とする。	①課題（一）～（六）を参考にして、自分自身の考えを率直に表現する。肯定できるか否かという点についても確認する。 ②登場人物の整理とともに、自分の置かれている状況についてもまとめさせる。 ③成長という点からも姫君と自分との接点を示唆する。 ④課題（七）「〇年後の姫君」・「〇〇〇の手記」（800字程度）を配付し、読解のまとめとする。
時	《 評 価 の 観 点 》 ア 姫君像について、多面的に理解を深めることができたか。 イ 自分自身の置かれている現実を踏まえて、姫君像を表現することができたか。 ウ 表現上の視点は一貫しているか。	発 問 例	Q 1 姫君は、登場人物に対して、それぞれどのような思いを抱いているのか。あなただったらどうか。 Q 2 自分の将来に対する大敵たちの心配を、姫君は理解していたのか。 Q 3 あなたには、姫君のような、生き方や言動の基盤になる考え方や信念があるか。 Q 4 その考え方や信念を、周囲の人々は理解してくれているか、それについて何と言っているか。 Q 5 姫君は、自分の美質について自覚を持っているのか。 Q 6 姫君にとって、虫と蛇とはどのような存在であったのか。 Q 7 ものの本質とは何だろうか。とらえることができるのか。

6. 評価の観点（事後評価）

- ①単語調べ、課題プリント、作文等に積極的に取り組んだか。
- ②物語の展開や人物描写の視点を押さえながら、本文を的確に読解し、鑑賞できたか。
- ③登場人物の置かれている状況やその言動を示す表現に注目して、それぞれの人物像を多面的に理解できたか。
- ④自分なりの問題意識をもって、古人の生き方から現在の自分を見つめ直す契機を得たか。
- ⑤助動詞や係り結びなどの古典の基本的な言語事項の理解を通して、読解が深められたか。

7. 考察

古典教材としての「虫めづる姫君」は、次の2点において短篇物語として生徒に十分に読み応えのあるものであった。一つは、姫君自身の発言や行動から、姫君の人となりを理解しやすかったことであり、またもう一つは、他の登場人物の配置が効果的で、他の登場人物の視点から姫君の在り方を読み取りやすかったことである。そのため、読解を通じて古典の世界に対する興味・関心を引き出すこともできた。また、現代語訳の難しいところに脚注を加えたり、漢字の読み、読解のポイント、文法事項を精選したりしたことが、登場人物の発言や態度の的確な読解に効果をあげたと思われる。

主人公「虫めづる姫君」自身の発言や行動からの人物理解については、状況を踏まえて読解を進めるよう配慮した。そのことによって、姫君を、未熟ではあるが人間の誠実さや真理・本質を探究する姿勢を評価する人物として理解することができた。自分たちと年齢の近い姫君に親近感を覚えやすかったのか読解が深まるにつれて、生徒は実に生き生きとした姫君像を構築していった。表現に即した読解が人物理解への有効な手段となることを生徒自身も実感することができたのである。

また、他の登場人物との関係から姫君の人物像を理解する際には、姫君との距離を測りながらそれぞれの発言や行動を読解するようにした。姫君以外の登場人物を姫君の他者として意識し、姫君の人物像を、姫君を中心とした人物関係の中で多面的にとらえようとしたのである。それは同時に、生徒に自分自身の人間関係を整理するための有効な方法になることを意識させることにもつながった。自己と他者、自己と社会、あるいは自己の在り方にかかわる問題は、生徒自身にとっても身近な問題であり、読解を進めていく中で自己と他者との関係をとらえなおし、自分なりの問題意識をもって自己の生き方を考える契機とすることができたのである。

評価については、特に事中評価に重点を置いた。各時の学習事項がどの程度達成されたかを確認できるような設問を課題プリントの中に用意するようにした。結果として各時の学習事項は生徒の実態に即したものとなった。

「型破り」とも「風変わり」とも評せられがちな人物への興味から、本単元の学習活動は始まった。登場人物の発言や態度を的確に読解し、主人公の人物像を総合的にとらえていく過程において、生徒の興味・関心は時代背景や他者理解という問題にまで深められていった。登場人物の在り方を自己の問題としてとらえなおそうとする意欲も作文などから伺うことができた。

今後は、『源氏物語』など他の作品を読むことによって、今回得た実践的な国語の能力をさらに深めていくような指導についても検討を加える必要がある。

3 言語活動への関心・意欲を引き出して、実践的な国語の能力を養う漢文指導の工夫
 <はじめに（主題及び単元設定の理由）>

古代中国の思想は、西洋哲学の一部に見られるような抽象的思弁が少なく、現実社会の問題を解決するための思想として、人間はどうあらねばならぬかという生活規範が主流のものであった。また、古代中国の文字文化は、まず中国語そのものとして日本に輸入され、やがて古代日本語として読み慣わされるようになった。これが「漢文」の起源である。漢文は、漢語が和語に同化され市民権を獲得するようになって、日本人の代表的な文章形式の一つとしてさらに発展していったと考えられる。先人が漢文から受けた影響は計り知れず、その伝統は、今でも諺や行動様式として我々の日常生活に数多く生かされている。

新しい学習指導要領の古典講読の目標においても、漢文は古文とともに我が国の文化と伝統に対する関心を深め、古典に親しむ態度を育てるものであることが強調されている。

数年前から、「三国志」の授業を希望する生徒が出てきた。「三国志」が近年コンピューターゲームの素材として、生徒に新鮮な印象を与えたものであった。生徒の関心は、主に躍動する個々の人物像に集中した。そこで、本単元では生徒が比較的容易にイメージでき、関心を持ちやすいように、具体的な人間の行動を扱った作品を取り上げ、漢文の世界に対する生徒の関心・意欲を引き出し、漢文に親しませることを意図した。

また、今日まで連綿と受け継がれてきた「漢文」の伝統を継承して、音読や暗唱を積極的にとらえなおし、音読の内容理解に果たす役割と、暗唱が生涯学習の契機となる視点とを重視し授業を展開した。形骸化した教訓ではなく、具体的な人間の苦悩や生き方に接することにより、時代を超えて伝わってくる共感を生徒に追体験させ、自分なりの人間観・人生観を培わせ、生涯を通じた学習に目を開かせることこそ、真の国語の実践的能力につながると考えた。

入門編

1. 単元：現代小説とその原典となった漢文との対比を通じ、登場人物の把握を深める。
2. 教材：中島敦『弟子』並びに論語、史記、孔子家語、春秋左氏伝及び礼記の該当部分
3. 単元の目標：①漢文を書き下さずに読む習慣を身に付け、暗唱することにより、漢文の口調に親しみ、漢文に対して興味・関心をもつ。
 ②原典となった漢文と、中島敦『弟子』の表現を比較して、漢文の簡潔な文体を現代文に生かす方法を理解し、実践的な表現能力を身に付ける。
 ③教材の読解を通じて孔子や子路の人物像を具体的に把握し、その生き方についての感想を表現して、自己の生き方を考える契機とする。

4. 指導計画（第1～3学年対象、配当時間6時間）

時	指導事項	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
第1時	①「論語」	①「志学」「而立」「不惑」などの言葉を挙げて、「論語」に関して、どのようなことを知って	①「論語」が日本文化に与えた影響について、説明する。

第1時 導入		いるかを発表する。 ②「論語」先進編を音読する。 孔門四科十哲について理解する。	②可能な限り多数を指名して音読させる。それぞれの弟子についてのエピソードを紹介する。
	<p>《評価の観点》</p> <p>儒教倫理が日本文化に与えた影響を理解し、孔子やその弟子たちに親近感をもつことができたか。</p> <p>* アジアの急速な経済発展の原因の一つとして、儒教が国際的にも注目されている点にも触れる。</p>		
第2時 展開1	③「史記」仲尼弟子列伝	③範読を聞き、その後指名により、返り点に注意して、音読する。	③可能な限り多数を指名して音読させる。
	④「孔子家語」子路初見	④範読を聞き、斉読し、書き下さずに読めるようにする。	④上記③に同じ。
<p>《評価の観点》</p> <p>返り点に従いながら、ゆっくりと音読し、漢文の口調に慣れることができたか。</p> <p>* 書き下さずに読む方が実践的であることに気付かせる。</p>			
第3時 展開2	⑤中島敦「弟子」一	⑤指名により音読し、子路の弟子入りに至る経過を把握する。	⑤文体に注意を払わせながら音読させ、その後、人物の心情を中心に、読解させる。
	⑥「弟子」と原典との比較	⑥漢文と比較して、中島敦の創作の表現効果を考える。	⑥子路の弟子入りの理由に注目させる。
<p>《評価の観点》</p> <p>子路がなぜ孔子に弟子入りしたかについて、テキストによる違いが把握できたか。</p> <p>* 原典に比べて、「弟子」では子路の心情が詳細に説明されていることに気付かせる</p>			
第4時 展開3	⑦孔子と子路との関係	⑦子路と孔子の関係を理解する	⑦「弟子」の粗筋を紹介する。
	⑧「論語」先進編による、孔子と子路との関係についての理解の深化	⑧孔子が子路をどのように評価していたかを考える。	⑧子路が「論語」の中にどのように登場しているかを紹介し、孔子が予言した理由を考えさせる。
<p>《評価の観点》</p> <p>子路の性格から、孔子が子路の悲劇的最期を予言していたことを理解できたか。</p> <p>* 子路は、孔子の弟子の中でも特異な存在であったことに気付かせる。</p>			
第5時 展開4	⑨中島敦「弟子」十六にみられる衛の状況	⑨指名により音読し、登場人物の人間関係を図表の形にまとめる。	⑨ノートにまとめさせ、確認する。
	⑩「春秋左氏伝」哀公十五年、「礼記」檀弓上、「孔子家語」曲礼子夏	⑩範読の後、指名により音読する。「春秋左氏伝」は特に繰り返し読み、暗唱できるよう努力する。	⑩書き下さずに読む習慣を身に付けるよう指導する。また、暗唱により、漢文の簡潔な文体が自分のものになるようにする。

<p>《評価の観点》 暗唱のために繰り返し音読することによって、漢文の口調を身に付けられたか。 * 当時の衛の状況：子の輒が衛侯の位につき、父の蒯聩がその位を伺っていた。</p>			
第6時 まとめ	<p>⑪中島敦「弟子」十六の後半と原典との比較 ⑫子路の最期についての感想文</p>	<p>⑪音読して、漢文と「弟子」の表現の違いに注目し、その効果を考える。 ⑫表現に注意しながら、感想文を書く。</p>	<p>⑪中島敦の創作により、表現内容がどのように変化したかに気付かせる。 ⑫漢文の簡潔な文体を自分の表現に生かすように指導する。</p>
	<p>《評価の観点》 「弟子」で、子路と群集との対立関係に気付くことができたか。 * 子路：自分が正しいと考えることのために命を捨てる。 群集：自分たちの利益を考え、有利な方に味方をする。</p>		


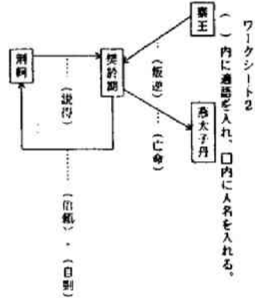

5. 評価の観点（事後評価）

- ①書き下さずに読み、また、暗唱することによって漢文を読みこなし、漢文の世界に親しむことができたか。
- ②漢文の簡潔な文体を現代文に生かす方法を、小説と原典との比較をとおして理解し、自己の表現とすることができたか。
- ③孔子・子路の人物像を教材の読解をとおして具体的に把握し、彼らの生き方について自分なりの考えをもち感想文の中に自己の生き方を述べることができたか。

講読編

1. 単元：史伝を通して人間の生き方と、その行動原理を考える。
2. 教材：「史記」刺客列伝（荊軻）
3. 単元の目標：①現代語訳、横山光輝「史記」など補助資料の助けを借りて、漢文の内容理解を深める。
②音読と部分暗唱を繰り返すことにより、歯切れのよい漢文のリズムを身に付け、何度も口ずさむことにより、理解を深め、親しむ。
③司馬遷の生き方から、古代中国の「史官」の使命を理解し、「刺客列伝」の登場人物に対する共感を通して、自己の生き方を見直す。
4. 指導計画（第1～3学年対象、配当時間6時間）

時	指導事項	学習活動	指導上の留意点
第1時 導入	<p>①古代中国における「史官」の使命と司馬遷 ②「史記」の構想の理解</p>	<p>①「春秋左氏伝」崔杼弑君の挿話を聞き「太史」の使命を知る「李陵の禍」の大筋を理解する ②歴史を人物中心に描く「紀伝体」という手法をとおして、司馬遷がいかに多様な人間像を描</p>	<p>①「太史」にとっては、真実の記録こそ全てであり、その使命感に注目させる。 ②「刺客列伝」の登場人物に対する司馬遷の共感に気付かせる また、「呂后本紀」のように皇</p>

		こうとしたかを知る。	帝以外でも本紀にとられている点などを指摘する。
	<p>《評価の観点》</p> <p>宮刑を選択してまで「史記」を完成させた使命感のすさまじさを感じ取れたか。*宮刑とは：『男・女の交接器を除き、または閉ざすこと。死刑に次ぐ重刑。腐刑。』</p>		 <p>横山光輝「史記」</p>
第2時 展開1	③「田光自刎」	③範読に続き各自音読し、現代語訳を参照し読解する。なぜ、田光が自刎したのか考える。	③田光の自刎は、太子丹の不用意な言葉に端を発していることに気付かせる。
	<p>《評価の観点》</p> <p>自刎した田光の士人としての矜持が理解できたか。*自刎とは：『自ら首をはねること。自刎。』</p>	<p>* 自刎の契機となった出来事と著者の語る理由付けに注目する。</p>	
第3時 展開2	④「盛樊於期首函」	④上記③と同じ。	④荊軻は田光，樊於期二人の命と心を預かったことに気付かせる。
	<p>《評価の観点》</p> <p>田光・樊於期の死と、「刺客列伝」のテーマ「士は己を知る者のために死す」との関連に気付いたか。* 樊於期：秦の將軍。罪を受け燕に亡命。家族を皆殺しにされた。(罪の内容は諸説あり)</p>	<p>* 荊軻の申し出に応じ、即座に自刎した樊於期の日日の悔しさを考える。</p>	
第4時 展開3	⑤「風蕭蕭兮 易水寒」	⑤範読の後、荊軻の出立部分を繰り返す。	⑤暗唱には、できる限り多くの生徒を指名する。また太子を怒鳴りつけた言葉に注目させる。
	<p>《評価の観点》</p> <p>出立部分の暗唱はできたか。歌の意味は理解できたか。荊軻の心境を自分自身のもので味わえたか。*『風蕭蕭として易水寒し、壯士一たび去りて復た還らずと』特に「壯士」という語に注意をはらわせる。</p>	<p>* 太子丹の焦りに振り回される荊軻の心境を理解する。</p>	 <p>易水 (横山大観筆)</p>
第5時 展開4	⑥「凶窮而七首見」	⑥荊軻の秦王暗殺が未遂に終わった場面を現代語訳参照の上で読解する。暗殺失敗の原因を考える。	⑥秦は厳格な法により統治されていたために、秦王が荊軻に追い回されるような椿事が起きたことに気付かせる。秦舞陽はどうしていたのか考えさせる。
		<p>* 荊軻の最後の言葉から暗殺失敗の原因を考える。</p>	

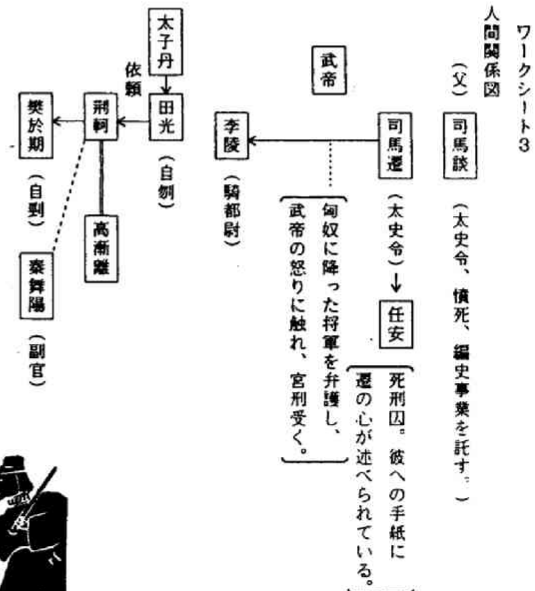
<p>《評価の観点》 暗殺失敗の原因は、秦舞陽にあることに気付いたか。一人の壮士の英雄的行動も為政者の判断の誤りによって水泡に帰すことが、荊軻への共感をもって理解できたか。 * 秦舞陽について：わずか13歳で人を殺したという人間が、果して豪傑なのだろうか。年若くして実物以上の評判を得た人間の悲劇がここにある。</p>		
第6時 まとめ	⑦後日譚及び感想文	<p>⑦「高漸離舉筑朴秦皇帝」の概要を理解する。魯句踐の言葉から荊軻の人間性を知る。著者を含め、講読編に登場した人物を一人選び感想文を書く。</p> <p>⑦関心をもった人物は誰かということをはっきりさせる。共感でなくても構わないが、自分ならどうしたかという仮定に基づいて書かせる。</p>
	<p>《評価の観点》 授業に登場した人物は、皆それぞれ信念をもち、それに忠実であろうとする。顧みて自分はどうかという視点で書かれているか。 * 司馬遷と荊軻を中心に、それぞれ人間関係図を書かせる。 そこから一名を選び、何について関心をもったか、自分はそれについてどう思うか、という感想を書かせる。</p>	

5. 評価の観点（事後評価）

- ①漢文そのものから、登場人物の人間性が読み取れるようになったか。
- ②暗唱がすぐに口をついて出るようになったか。
- ③難解だと思われた漢文が、理解でき読めるようになったか。また、それが、自分で確認できるようになったか。
- ④感想文中に、自分自身の生き方を探る転換点となったと思われる表現が見られたか。



太子及賓客知其事者皆白衣冠以送之至易水之上既別取道高漸離擊筑荆軻和而歌爲變徵之聲士皆垂淚泣又前而爲歌曰：風蕭蕭兮易水寒，壯士一去兮不復還。復爲羽聲，仇侖士皆瞋目，髮盡上指冠於是荆軻就車而去終已不顧。



秦王を追う荆軻（武氏祠画像石）

〈終わりに（考察）〉

入門編 本単元の目標は、漢文を書き下さずにそのまま読解し、暗唱によって漢文の簡潔明瞭な文体を身に付け自らの表現に生かすとともに、教材の読解により自己の生き方を見つめ直すということであった。従来は、訓点学習の後、書き下し文を書く技術を身に付けることに重点が置かれていた。しかし、我々が漢文を読む場合、常に書き下し文に書き替えて読むわけではなく、訓点及び送り仮名がついた漢文をそのまま読むことが多い。生徒は、最初は拒否反応が多く、範読の時、脇に書き下し文を書いている生徒もいた。しかし、慣れるに従い、抵抗なくそのまま読むようになっていった。また、暗唱にも余り苦勞なく生徒は入り込めた。

さらに、同内容の現代小説を並行して読ませているため、生徒が内容を把握しやすく、今までの教材に比べて生徒が人物を身近に感じる事ができたようである。その上、現代の文章に漢文の簡単明瞭な表現が生かされていることも理解することができた。

そして、最後の感想文では、必ずしも子路の生き方を肯定する生徒ばかりではなく、様々な評価が見られたが、生徒自身の生き方を考えるきっかけとしては十分な効果があった。

（反省点）生徒の興味が漢文よりも小説の方に向かいがちとなった。しかし、このことも今後の漢文の契機となればよいと考える。今でも古代中国を舞台とした小説が数多く読まれている。したがって、入門用の教材として、生徒の関心を引き付けるため、このような小説を活用し、かつ原典との比較をとおして新しい教材を開発する余地が大いにある。また、こうした小説の読者の年齢層が、かなり幅の広いものと予想される。その読者が、原典としての漢文に興味・関心を示すようになれば、生涯学習の観点から言っても、意義深いことであると考えられる。

講読編 本単元の目標は、「史伝」を学び、心に残る一節を暗記・暗唱することによって、士人の自己に対する厳しさと行動原理を把握し、それを生徒自身の内面に取り込み、生涯学習への道筋を付けることにあった。「人はパンのみにて生きるに非ず。」人間は必ず己の生きる意義を求めるものである。人生の最も多感な時期を送る高校生に、漢文を通してその萌芽を体験させたいと考え、授業を展開した。

現在理解できなくとも、後に反芻し咀嚼することができれば、それでよい。素読と並んで、漢文の暗唱とは本来そのようなものではなかったか。苦難に立ち向かう時、ふと思い出される漢文の一節に、郷愁とともに現実社会の光と影に対する深い理解が加わることを、望んで止まない。テーマは、入門編と共通するが、さらに一歩踏み込み、現在から未来にわたる可能性をも考慮した。

授業はまず、興味をもたせる方法として、横山光輝『史記』を使って、司馬遷が「李陵の禍」に遭い宮刑となったストーリーから始めた。かなり大胆な導入だったが、これは功を奏し、生徒の漢文に対する抵抗を無理なく取り去ることができた。特に重視した暗唱は、長文は難しかったが、荊軻の詩は、全員が暗唱できた。僅か2行であるが、ここが出発点である。また、感想文からは、親近感を覚えたという肯定的な内容が多く見られた。

（反省点）生徒は内容に対する興味から、ストーリーを追う傾向が強く、現代語訳のみを頼りとする者がいた。コンピューターゲームという意外な素材の味方を得たのが本単元の出発点であった。今後とも新たな教材化に向けて素材を検討していきたい。

IV まとめと今後の課題

生徒の国語に対する「関心・意欲」をいかに引き出し、いわゆる内発的な動機付けとするかが、本研究の成否にかかわる決め手である。そして、そのため、学習内容と生徒自身とのかかわりの中で教材化を図り、生徒の学習活動にゆさぶりをかけることとした。また、表現・理解・言語事項の指導を様々な角度から工夫して組み合わせ、明日からすぐ役立つ、あるいは将来的に役立つような言葉の種を生徒の心に蒔くことにより、言語生活を豊かなものとする「実践的な国語の能力」を養うことができると考えた。これらの点を踏まえ、各分野で以下の研究実践を行った。

現代文班は、「やさしさ」という言葉をテーマとして、「読む」「話す」「聞く」「書く」という多面的な言語活動を組織して、理解した内容を自分なりに表現し、また表現から理解へという学習活動を繰り返すこととした。このことにより自己の認識が深められ、進んで考え、感想や意見を述べる雰囲気が生まれてきた。特に、グループ学習においては、複数の教材を使用し、生徒が協力して問題解決にあたり、互いに発表し合うことで、ねらいの一つである関心・意欲の向上に大きな成果が見られた。

古文班は、『堤中納言物語』の「虫めづる姫君」を教材化した。課題プリントを使用し、学習事項がどの程度達成されたかを確認しながら読解を続けることで、意欲を持続させることができた。生徒は、読解の過程で、登場人物の発言や行動について現代との比較考察を加えることにより、当時は風変わりと評せられていた虫めづる姫君そのものの理解を深めていった。そして、古典の世界を身近に感じることで、自分自身を新たに見つめ直す契機とし、古文に対する関心と理解を高めることができた。

漢文班は、入門・講読と2段階の学習構成をとり、どちらも漢文の暗唱を重視した。まず、暗唱という音声面の言語活動を繰り返すことにより、漢文独特のリズムを体感させる。その上で現代小説・漫画などを利用し、内容を把握しやすくした。その結果、生徒の登場人物に対する関心を引き出し、今までになく意欲を高めることができた。以上のような指導方法を通して、漢文の魅力や面白味を見い出させることが十分可能であることを再確認した。

今後の課題については、各分野ごとに以下に掲げることとする。

1. 現代文班では、学習意欲の育成、授業の活性化を図るためにも、今回の実践のような様々な言語活動を組み合わせた単元を、年間指導計画の中に導入することを提言する。さらに、学習形態については、複数教材の同時進行など様々な工夫を加えるとともに、評価を次の指導に生かせるよう、事前・事中・事後評価の観点の明確化について考察を深める必要がある。

2. 古文班では、今回の研究主題の解明を通じて、古文の学習には言語活動に対する興味・関心が不可欠であることを再認識した。今後は、古文に対する読解力を高めながら、『源氏物語』など他の作品を読むことによって、今回得た実践的な国語の能力をさらに発展させ、深めていく必要がある。

3. 漢文班では、生徒の漢文に対する興味・関心をさらに高め、より積極的に学習に参加させるための方法を工夫することとする。このため漢文を題材にした「現代小説」、「漫画」のみならず、「コンピューター・ゲーム」までも視野に入れ素材を発掘して教材化に努め、意図的かつ組織的に授業計画に取り入れていくことが必要である。